

獅子舞と呼ばれる芸能は、飛鳥時代に百済人の味摩之によって日本に伝えられた「伎楽」にそのルーツがあると言われている。伎楽そのものは平安時代に衰退し今日ではその伝承を見ることは叶わないが、奈良の正倉院や法隆寺には伎楽に用いられた獅子の面が数点伝えられている。また、伎楽より少し遅れて伝来した雅楽（舞楽）にもかつて獅子の舞楽が存在し、唐代の楽舞や散楽を描いたと伝えられる『信西古楽図』に獅子舞の存在が確認できる。現行の雅楽では獅子の伝承そのものが失われているが、毎年四月二十二日におこなわれる四天王寺の聖霊会では、雅楽の演奏に合わせて石舞台の上を歩く単純な所作の獅子の演目が残っており、当時の名残を見ることが出来る。

このように、獅子舞は伎楽や雅楽といった日本に渡来した芸能および歌舞をルーツとする事は明らかであるが、獅子舞が各地へと伝播し現在どのような特色をもって伝承されているのかその全容は未だ明らかにされていない。そこで本研究課題では、獅子舞の芸能と音楽的特徴に焦点をあて、和歌山県の紀中地域を中心とした獅子舞の実態を明らかにする。

筆者はこれまでに、和歌山県御坊市で伝承されている御坊祭の獅子舞調査の機会を得た。御坊祭は、和歌山県日高地方で最も規模の大きい祭礼行事である。その起源は不詳であるが、中世には氏神である小竹八幡神社で祭礼が執り行われており、天正十三年（一五八五）より中断していた御坊祭を寛永十九年（一六四二）に復興した記録が残されている。御坊祭では轆轤しや四つ太鼓、奴踊、雀踊、戯瓢踊といった多彩な芸能が奉納され、獅子舞も各氏子組によって伝承されている。

調査の結果、御坊祭の獅子舞は①獅子舞の芸能に物語（構成）があること、②獅子には獅子笛と呼ばれる笛の奏者一名（または二名）と太鼓が必ず付くこと、③笛の演奏は複数の旋律パターンを組み合わせで構成されていること、以上三点が特徴と位置付けることが出来る。また類例調査として御坊市周辺の獅子舞を調査した際、上記の特徴をもつ獅子舞が見受けられ、和歌山県紀中の獅子舞に何らかの共通性が見出せるのではないかと考えた。そこで本研究では、和歌山県紀中地域を調査対象として御坊祭系の獅子舞の分布を考察する。

今年度実施した調査は、日高郡内の由良祭と印南祭、田辺市の野中の獅子舞である。由良町は日高郡内の最も北に位置する。一方、印南町は日高郡内の南に位置

し、御坊市と隣接している。

まず由良祭の獅子舞について概説する。由良祭では横浜、里、南、江ノ駒、網代、阿戸からそれぞれ獅子舞が奉納される。由良祭の獅子舞は笛と獅子屋台の太鼓、締太鼓、鉦（ちゃみせん）によって舞われる。笛を複数人で演奏する点や楽器に鉦が用いられるなど御坊祭と異なる点は見受けられるが、獅子の芸能に物語構成が付く点、獅子の動きが笛および太鼓と密接に関係しており、笛の旋律構成など御坊祭の獅子舞との共通点が多く見られた。

一方の印南祭は氏子域が印南町と御坊市にまたがっており、七つの地区より獅子舞が奉納される。本宮では、御旅所の前で複数の地区の獅子舞が同時に奉納をおこなうため、各地区の獅子舞が同じ舞場に入り乱れて舞うのが特徴である。二人立の獅子に、獅子屋台に置かれた太鼓と笛方が付く。御旅所では獅子が大きく動き回り、その所作が囃子（笛や太鼓）と常に合わさっているとは考えにくいことから御坊祭の獅子舞との類似点は少なく、獅子舞の系統も異なっている。このことから印南祭では御坊市の一部地域を氏子域とするものの、御坊祭系の獅子の伝承は御坊祭の氏子域特有のものであると指摘できる。また、印南町と隣接する田辺市の野中の獅子舞は大神楽系の獅子と芸能が大きく異なり、田辺市内の他の獅子舞の系統も同じく大神楽系のものが多いことから、日高地域と田辺市の獅子舞の伝承分布では一定の境界性を引くことができる。

以上により、御坊祭の特徴をもつ獅子舞の系統は由良祭が北限であることが今年度の調査によって明らかになった。また、御坊祭より南の地域では獅子の系統が大きく異なることから、御坊祭系の獅子舞の伝播は日高地域の中でも限られた地域に点在しているといえる。

【参考文献】

『御坊祭総合調査報告書』御坊市教育委員会、2022年